



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.117

2013.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

31

「大学四年間 その集大成は卒業論文」

高校を卒業で進路を決めるとき、父は二・三男には分ける財産が無いから大学で好きなことを勉強せよと言われた。私は明大で考古学を、弟は横浜国大で地学を学んだ。

私は高校時代から追っている押型文土器と弥生土器を大学で学習を深め、このどちらかを卒論にと考えていた。始め押型文土器と思っていたが岡本勇さんが修士論文で押型文土器を追ったのでやめた。

林里遺跡の土器片を杉原荘介先生・山内清男両先生に見せると強い関心を示し、東日本の弥生文化開始に繋がる土器だという。1953年私は下伊那の弥生文化についてまとめ雑誌『伊那』に発表して、地域の弥生土器の型式編年を一応考えた。その上で下伊那での弥生土器の起源を追うために、林里遺跡の縄文晩期終末の浮線網状文土器と東海地方最終末の条痕文土器との関係を、条痕文土器を中心に追ってみたくなった。同年6月の杉原先生の講演『縄文式土器と弥生式土器との関係』を聴いて、その中で両者の繋がり土器として林里遺跡の土器を上げられた。土器を持つ私はこれこそ追求をと強い意欲を持った。西志賀貝塚遺跡の調査を

2年生の考古学実習で行うことになり、私は条痕文土器の事前調査をして臨んだ。名古屋で条痕文土器を追っていた紅村弘さんと親しくなり意見交換を重ねた。貝塚は貝田町層(中期)と西志賀層(前期)の間に朝日層(中期前半)の層を確認し、其々の層から特徴ある条痕文土器を見つけ嬉しかった。終わっての8月7日から林里遺跡を調査し多くの条痕文土器と遠賀川式土器壺を得てこの時期への研究意欲を強くした。

日記 9月28日「五貫森式土器の分布と遠賀川系土器の分布と一致する。それは何故。彼等が受け入れるだけの要求性があったのではなからうか?面白

い課題だ。一つやってみようか。静岡・山梨・長野・愛知・岐阜等の地で。それを卒論にするか」10月10日「杉原先生に林里遺跡の拓本をみせる。遠賀川式土器には驚いていた。僕が考えていたことは先生を超えていそう。一寸した優越感が湧く。どうしても卒論には完成したい」と2年生の秋に卒論への意欲を持った。

1955年1月1日「何といっても具体的仕事で最大なものは4年生となり、僕自身の卒論であろう。新しい機軸で自分の出来る限りの能力でやってみよう」新年抱負で意気込む。3月25日「卒論は“中部日本の条痕文土器の研究——縄文文化から弥生文化移行の特異性”と決めて4年生に臨んだ。4月22日 一回目の論文指導でテーマの指導を受ける。去年から資料は部分的に集めていたが、いよいよ本格的な取り組みになる。一つは方法論を持つこと。そのために井尻正二さんの『科学論』を読み、それを考古学に置き換える。二つは関係文献を読んで学史としてのとらえ。塚田光さんに文献カードを印刷してもらい、文献の一つ一つをカードに記入。一番通ったのは東大理学部人類学の図書室でした。三つは関係遺跡の資料集め。明大・東大・早大所蔵資料の実測と拓本。地域では長野・愛知・岐阜・静岡4県の資料を求めて学校・資料館・個人と文献からと人の繋がりで知った遺跡・遺物を訪ねて拓本と実測図をとった。名古屋城内旧兵舎の名古屋大学学生宿舎を本拠地にして愛知・岐阜両県を集中して調査した。嬉しかったのは岐阜阿弥陀堂遺跡の遺物初見でした。図版と二度三度と書き直す原稿に苦勞し書き上げたのは提出日前日1月10日。製本して上京、途中諏訪で下車し藤森栄一先生にみせる。『東海地方における条痕文系土器について』の題名、本文224P・注200P・図B4大225Pの3分冊。内容はともあれ拓本は貴重な資料なのでいずれはどこかの資料館に保管をと考えている。

*巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



▲卒論三冊

目次

■田舎考古学人回想誌	大学四年間 その集大成は卒業論文	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第110回)	千葉太朗 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第10回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「赤い旧石器を求めて」	織笠明子 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第10回)

石井 則孝

《わがまち中野区鷺宮について》

1. 喜寿を迎えて

今年2013年(平成25年)は、私が喜寿を迎える年になってしまった。馬令を重ねること77年とは……。昭和30年代の大学・大学院時代の恩師を思い出してみると、古稀の頃にはそれぞれの分野で一家言をもつ研究者になられていた。自分を振り返って考えてみた時、少しは師に近づいているのか 学問的に何か残してきただろうか反省しきりである。そんなことを思いながら毎日元気になんとか動き廻っていられるのは、西武新宿線鷺宮駅から歩いて100メートル30秒で玄関に入れるという家に住んでいるからではないかと、オヤジに感謝しつつふと考える時がある。そこで、こんな私を育ててくれたまちについて記してみたい。

2. 鷺宮とは

仲間たちからは、「石井さんは、ころがってでも家へ入れるから良いよな」とよくいわれている。住所は東京都中野区鷺宮3丁目、旧番地というと鷺宮は1丁目から6丁目までである。野方駅から下井草駅の間に存在している。急行に乗れば、高田馬場へ8分で着く。昔は鷺宮始発の電車もあった。新宿で遊んでいくら遅くなくても24時40分の最終便にさえ乗れば、深夜1時には家に辿り着く。乗り越したとしても、下井草で降りれば、徒歩15分で帰宅することが出来る。こゝ10年以上タクシーのお世話になったことが無い。雨も心配なく、20年以上前に買った傘を今でも使っている。さらに良いことには、JR中央線阿佐ヶ谷駅と西武池袋線中村橋駅とを結ぶ南北に走る中杉通りというものがあり、その真中が鷺宮で、サラリーマン・学生が住む便利な街として栄えてきた。

3. 西武線について

西武線というのは、モノを送る郊外電車としても運転されていた。本川越を終点としていた西武線、昔は高田馬場駅が東京側の終点であった。駅の下を流れる神田川の岸辺に砂利場という船着き場があって、多摩川で採取した砂や砂利を都心へ送っていた。一方、池袋から飯能まで走っていた電車は、武蔵野線と呼ばれ、西武戦とは区別されていた。それは、都心で出される糞尿を武蔵野台地で生産される野菜や麦・米の肥料として送っていた。

そのためか、現在の西武新宿線を「ジャリ電車」西武池袋線を「オワイ電車」という通称名が戦後まで使われていた。住民の指向としては、ジャリ電車の方を上とみて、郊外の住宅が建てられていった。落合文化村の誕生はそのよい例である。

戦後、公団住宅の建設が始まってからは、人々の意識もかわり、環境の変化、交通網の発展と共に武蔵野線の沿線から畑地・林地が消え、集合住宅・工場建設・ガスタンクの建設・学校建設等の大規模開発によって、その環境はすっかり変わり、平成の時代になってからは、沿線の評価が逆転し、西武池袋線の繁栄は、秩父への特急運転と合いまって、今や飯能から横浜中華街へ乗り換え無しで行けるといって、普通の頭では想像できない変貌をとげたのである。

4. 鷺宮の環境について

駅前には、妙正寺川という河川が、井萩の妙正寺池を源として流れがある。これが野方・沼袋へと連なり、やがて落合で神田川へとつながっている。妙正寺川の存在は、中野区の北部の田畑を潤す重要な川として存在していた。駅の南側の台地には、八幡神社があり、真言宗武蔵野の三大寺院のひとつ福蔵院が所

在し、この台地に連なる天神山という丘陵が阿佐ヶ谷・下井草へと連なり、かつては駅南側に大きい釣り堀りもあった。川沿いの桜並木と共に自然豊かな土地として愛され、川岸のいたるところで魚釣りができた。また、西へ目を向ければ、好天であれば霊峰富士山が望める絶景の地でもあった。阿佐ヶ谷に近いこともあって、昭和10年代頃から色々な文化人が住むようになっていった。交通の利便さから、大田区や世田谷区とはひと味違った街で、関心の高い土地でもあった。母方のルーツが、目白の学習院下に住んでいたため、学習院の拡張に伴い土地を撤収され追出され、その流れで鷺宮駅前に住むようになった。駅前に住んで100年という年月が経過している。

5. 沢庵御殿の存在

黄色いタクアンは、日本人であればだれでも知っていることであろう。この原点のひとつが鷺宮に存在していた。

中野区から練馬区へ連なる武蔵野台地は、女性の足に例えられる練馬大根の大産地であった。冬になると、畑のいたるところに、竹や木材で組まれたイカダにつるされた真白い大根が干されていた。冷いカラツ風が吹く台地であったので大根干しには絶好の土地柄でもあった。この干し大根が出来上がると、そのほとんどが、大地主の大野猛夫家の広大な敷地に用意された数十本の大樽(人間が5～6人入れる)へと漬け込まれていった。何屯という単位で出荷され、第一次世界大戦、第二次世界大戦の兵士の弁当のオカズとしても消化されていった。その収益によって大野家は鷺宮一の大邸宅を建設し、一昨年まで存在していた。こんな大金持ちも居た鷺宮でもある。この大樽のひとつだけが区立の郷土資料館にも残されている。御殿は、昭和12～3年頃に完成したと聞いているが、便所が当時として最新の水洗便所が作られ、その汚物がどこへ流されていったのかは現在も不明なのである。解体される前に建物の図面をとるために2日間ほど行ったが、この謎を解くことは出来なかった。

6. 「鷺宮文化人村」の提唱

わが家の環境は、駅前でありながら、中杉通り裏手にあり、家の南側にはマンションが立ち、裏は小公園になっているので静かなたた住いとなっている。庭に柿・梅・モミジ・ザクロ・松・柑橘類の木々があり、朝は小鳥がさえずり、雉鳩が住みついている。昨年まで墓も居たが今年はどうか?狭いながらも良好な環境を作っている。

そこで、ここ数年どんな文化人が住んでいたのかを調べている。思い浮かべる人のほとんどに実際にお目にかかっていたので記憶を辿ることができ、「鷺宮文化人村」を提唱しても問題ないだろうと確信している。考古学関係者は、井草式土器の命名者である区立八中の校長であった矢島清作だけである。

芸術家から上げていくと、バイオリンニストの岩本マリ、作曲家・チェリストの平井康三郎・平井丈一郎親子、洋画家の三岸節子(画室が今も健在)、小泉清(ハ-

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

ンの3男)、峰村リツ子、日本画家の小谷津任牛・小谷津雅美の親子、彫刻家の長谷川昴、作家・詩人の壺井栄・壺井繁治夫妻、マンガ・児童文学の中島菊夫・中島サト夫妻、学者・研究者では、商学の石井頼三、歴史の京口元吉・木村時夫、思想・近代史の向坂逸郎・宮川寅雄・中村宗雄、女医で作家の常安田鶴子、

将棋の大御所升田幸三・米長邦雄、放送作家の志賀信夫、政治家の松村謙三、写真家のシーボルトの末裔中村順治、前記した沢庵御殿大野猛夫、政治史の海後宗臣、軍神隼隊長の加藤健夫等々、画家や陶芸家、書家等まだ4～5人は居る。服部バイオリンの製作者、野球の榎本喜八や映画俳優等も入れると大変か。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 110

池上曾根遺跡 ～ 大阪府和泉市

千葉 太郎

池上曾根遺跡は、大阪府の南部に位置する和泉市と泉大津市にまたがる弥生時代の大環濠集落遺跡である。それは現在、全国的にも広く知られているが、池上曾根遺跡の発見は明治年間に遡る。1903(明治36)年ごろ、地元の南繁則少年が自宅の土堀に石鍬が挟まっているのを発見したことに端を発する。大正年間には、南氏と親交のあった坪井正五郎や鳥居龍蔵などが、氏の招きによってこの地を訪れ、池上曾根遺跡は学会に知られるところとなった。

そして、1969(昭和44)年～1971(昭和46)年にかけて第2阪和国道(現在の国道26号)の建設に伴い、2万㎡にも及び発掘調査が実施された。この調査では、発掘調査と出土遺物の整理作業が分離され同時進行的に両者が行われるイスラエル方式と呼ばれる体制がとられたり、表土除去にブルドーザーなどの機械力が用いられたり、写真による遺構測量が地方自治体で初めて取り入れられたり、今でこそ当たり前になった発掘調査方法が実験的に行われたのである。池上曾根遺跡は、大阪府における行政発掘の原点としても重要といえよう。

この調査によって、弥生時代前期から後期にかけて連綿と続く遺構群が確認された。そして、最盛期中期には直径300mもの範囲を溝で囲繞された、全国でも屈指の大規模環濠集落であることが明らかにされた。

池上曾根遺跡はその重要性が鑑みられ、1976(昭和51)年4月26日に、環濠を巡る範囲を中心とした約11haが、国の史跡に指定された。1990(平成2)年度より史跡整備が開始され、それに伴う発掘調査も行われた。この調査で、環濠の掘削、埋没、再掘削というサイクルとその時々規模が確認され、また、環濠をはさんで居住域が帯状に展開することが明らかになったことから、環濠の防御施設としての性格に疑問を提示することとなった。さらに、集落の中心部では弥生時代最大級の大型掘立柱建物と内径2mものクスノキの一木割り抜き井戸が確認された。大型掘立柱建物に遺された柱の年輪年代測定がおこなわれ、そのひとつが紀元前52年に伐採されたことが明らかになり、弥生時代の年代観に大きな影響を与えた。

そして、2000(平成12)年度をもって第1期整備事業が完成し、史跡指定地全体の約3分の1が池上曾根史跡公園としてオープンした。公園は大型掘立柱建物が建てられた紀元前500年ごろの集落が再現されている。

このような池上曾根遺跡を発掘する機会を得た。それも史跡指定地内を、である。先にみた過去の発掘調査は、国道26号の西側、つまり、環濠の北側と南側、そして集落の中心部に関して実施されてきたが、東側についてはまったく調査が行われておらずその様相は不明であった。史跡公園全体の整備計画を作成するためにも集落東側の様相解明が急務となってきた。そこで、集落東側の環濠の位置確認と集落東側の様相の解明のため発掘調



土壇状遺構

査が行われることとなった。調査は2011(平成23)年度、2012(平成24)年度の2ヵ年で行った。

この2ヵ年の調査で、おぼろげながら弥生時代中期ごろの集落東側の状況について明らかになってきた。まず、東側でも、内側環濠(第1環濠)と外側環濠(第2環濠)の2条の環濠が確認できた。これらの環濠は、従来の見解のとおり、第1環濠が先に掘られ、それが埋没してから第2環濠が掘られたことが確認できた。

第2環濠の外側には、夥しい数の柱穴が検出された。これまで、集落南側では今回と同様な状況、つまり、環濠の外側にも居住域が広がることが確認されているが、北側ではそのような状況は確認されていなかった。集落の南側から東側にかけて環濠の外側にも居住域が広がることが明らかとなった。そして、第2環濠の外側には居住域とは別に、盛土を伴う土器棺墓が見つかった。棺は頸部を切断した壺で、これを据え置き甕の破片で蓋をして土を盛ったものである。

さらに、特筆すべきは、第2環濠の外側の近接したところで、幅4mほどの溝に囲まれた方形の土壇状遺構が確認されたことである。溝は南北方向と東西方向の直交する2辺が確認された。これらの溝の内側に土を盛り上げて構築されている土壇状遺構の基底部が確認できた。ただし、土壇状遺構はほとんどが削平されているため本来の姿は不明である。溝からは拳大から人頭大の河原石が、溝に沿って大量に出土している。この石は、溝の土壇側の立ち上がり部分にかたまっていた出土している。これらは人為的に並べられた状況がみられないこと、石の下にも埋土や土器が含まれていたことから、土壇側から崩れ落ちてきたものであると考えられる。つまり、本来は、石垣状なのか葺石のようなものなのかは不明であるが、土壇状遺構に石が伴っていたものと考えられる。

この遺構の性格については、現状では部分的な検出であるため、不明であるといわざるを得ない。このような形態の遺構としてまず思い浮かべるのは方形周溝墓であろうか。しかし、埋葬施設が確認できなかったこと、これまで池上曾根遺跡でも盛土部

分に石を伴うような周溝墓は確認されていないことから、方形周溝墓とはいいがたい。では、これは何なのか。シンボリックな建物である大型掘立柱建物と時期も方位もそろっているということは注目に値するだろう。正方方位を意識した方形区画にのった特別な施設であったのではないだろうか。

集落東側でも環濠外側に集落が展開していることが明らかに

なってきたが、どの範囲まで広がるのか、南から北にかけてどのように展開しているのかは、今後の検討課題である。

史跡公園が開園し10年以上経過したが、整備はまだまだ続く。今回の成果も含め、進化していく史跡公園に期待していただきながら、足を運んでいただければ幸いである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは村井実さんです。

考古学者の書棚

「赤い旧石器を求めて 一肱川流域の謎に家族で迫る」

沖野新一／唐崎旧石器研究会(2012)

織笠 明子

1995年11月、私達が沖野新一さん御一家の私設資料館である唐崎旧石器資料館にお伺いしたのは、この月の下旬のことである。地元の資料を採集し、資料館に展示されている、との話を初めて耳にしたのは、奈良の有本雅己・昭子御夫妻からであったと思う。愛媛県多田仁さんをお願いして、県内の資料見学に伺って、沖野さんにご紹介いただいた。ワクワク・ドキドキしながら資料館をお訪ねしたのは、その翌日である。沖野さんのお父様が自ら中心となって建てられたという資料館には、一步入った瞬間、「赤の世界」が広がっていた。この初めての赤い感覚に、思わず声をあげていた事を思い出す。

1991年、愛媛県伊予郡双海町東峰(現伊予市)で、赤い角錐状石器を表採してから、沖野さんの赤い石材への追及が開始された。それからまもなくすると、赤い石材の追及者は、四人の家族と一匹のゴールドレトリバーの探究者達へと広がっていた。

その後沖野さんからは、毎月のように『からさき』というB5版2頁の研究・活動記録が送られてくるようになる。石材の産地をみつけられたことを知ったのは、『からさき』からである。そして、その発見の喜びを分けていただいたのも、『からさき』である。

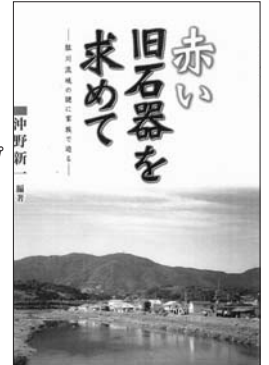
『発掘者』談話会という任意団体がある。今は亡き麻生優先生のもとに、様々な大学の出身者をはじめとする考古学徒が集まり、『発掘者』(最初は『岩下』からはじまる)を、ガリ版刷B5版4頁で、発掘調査時を中心に発行しつつ、学んできた場所である。当時、織笠昭(故人)にとっても私にとっても、『からさき』は『発掘者』とすぐさま重なった。

この『からさき』は、今や200号を越え、続いている。その時々での考えや視点を気負いなく表現し、考古学のみならず、民俗学や岩石学など幅広く、読む者に様々な刺激を与え続けてきている。こうした積み重ねの一端が、1998年『赤石をもつ狩人—二万年前の肱川流域へようこそ—』と題する著書として、自費出版されている。このたびは、この改訂版的な意味を込めて、沖野一家の家族と一匹が、赤石や肱川流域の旧石器に寄せる思いを中心にまとめたおしのが、本書『赤い旧石器を求めて一肱川流域の謎に家族で迫る』なのである。

本書は、次のような目次構成からなっている。

はじめに

- 第一章 古代へのロマン再び
 - 第二章 赤い旧石器の発見
 - 第三章 家族と共に
 - 第四章 県境を越えてタイムスリップ
 - 第五章 赤石の正体
 - 第六章 新たな謎
 - 第七章 家族の願い
 - 第八章 忘れえぬ人々
 - 第九章 思い出を糧に
- 家族の主な足跡
引用・参考文献
あとがき



沖野さんが、そして家族みんなが、楽しみながら赤い石材を、赤い石器を求め、少しずつねらいを定めて目的を達成し、かたちにしていった様子が、ありありと浮かんでくる。家族の喜びと楽しさは、次の展開へと進み、第九章に示されることになる。

考古学に興味を持った方なら、一度は表採の楽しみ、ドキドキ感・ワクワク感を味わった経験をお持ちではないだろうか。自ら目的を定めて歩き回る日々の中で、時には挫折を味わいながらも、願う資料が表採できた時のその喜び、高揚感、そして次の目標の設定へ。この楽しさを追体験できるのも、この本の良さである。そして、学問的にも、特定の石材と特定の地域の結びつきの問題、広域ではなく、地元の石材という点での利用のあり方等々、今後の課題が幾つも浮かびきっかけをいただくことができた。考古学の基本に立ち返ることができる読後感である。

考古学を知らない、興味のない方にとって、本書はある家族の物語として、読み進むことができる。一般書として読んで、著者の沖野さんが言うように「発見の感動、何かを追求し、それがかなえられた時の満たされた気持ちを共有」することができるからである。そして、それは家族皆が共に歩んできた軌跡であるという点において、共感感動する力が何倍にも増幅されて伝わってくる。

今、私にとって、元気を引き出してくれる素敵の一冊が、本書なのである。

(2013年5月1日記)

「田舎考古学人回想誌」を連載いただいております神村透先生に、長野県考古学会より「藤村栄一特別賞」が送られました。また、同時に受賞されます桐原健先生には2010年に「アルカ研究論集 第4号」へ寄稿いただきました。両先生に心よりお祝い申し上げます。

アルカ通信編集係

アルカ通信 No.117

発行日 2013年6月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>